

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、国（1,990,000円）、県（995,000円）の補助金を受け、平成4年4月9日から平成5年3月31日まで実施した。
3. 調査組織
 調査主体者 大井町教育委員会
 教 育 長 小林茂吉
 社会教育課長 吉田和子 文化財保護係長 岩崎保夫
 文化財保護係・発掘調査担当者 坪田幹男・高崎直成・鍋島直久
4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。（順不同）
 執筆は坪田幹男、鍋島直久があたり、それぞれ文末に記した。
 土器復元・拓影：中田藤子、中野和子、丹治つや子、遺物実測：鍋島直久、高橋けい子、石垣ゆき子、斎藤尽志、トレース：小林登喜枝、須藤さち子、図版作成：柚木嘉図子、遺構写真：坪田幹男、鍋島直久、遺物写真：荻原明、鍋島直久、また、本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。
5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏、機関より御指導、ご協力を賜った。
 浅野晴樹、荒井幹夫、有山隆造、今井堯、内田賢司、加藤秀之、神木繁嘉、駒井和久、桜井信枝、佐藤正志、笹森健一、島田一郎、田代治、谷井彪、中島宏、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治（敬称略）埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町立郷土資料館、大井町遺跡調査会。
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。明記して謝意を表したい。
 〈発掘調査参加者〉（敬称略）
 会沢泉、新井和枝、荒井美奈子、飯塚泰子、石川八重子、井上晴江、内田信治、海老原サナエ、大井美智子、大曾根キク子、遠田つる、笠原英子、片岡ミヤ子、金子君子、神木光治、小林こずい、小山エミ子、斎藤尽志、佐久間ひろ子、佐藤智子、鈴木英子、鈴木エミ子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、高橋明美、戸澤竹二、中嶋末子、仲里しげ子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、羽柴理恵、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、三村美代子、森脇やよい、ハッ井幸子、山形幸子、山下一枝、若尾久美子、若林紀美代。
 〈整理作業参加者〉（敬称略）
 石垣ゆき子、斎藤尽志、須藤さち子、柚木嘉図子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、中野和子
 ※1989年から発掘調査に協力いただいた、遠田つるさんが3月急逝されました。生前のご協力に深く感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

凡 例

1. 本書の図版の縮尺は、住居・土坑1/60、炉1/30、土器実測図1/4、土器拓影1/3とした。
2. 遺構図中の細数字は、床面もしくは確認面からの深さ（cm）を示す。
3. 胎土粒子に関する各項の基準は次のように定めた。
 小礫；2.0mm以上、粗砂；0.2～2mm、細砂0.2mm以下。
4. 土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。

I 経緯

○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積8㎢で現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80%近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」(昭和53年～平成元年)「町内遺跡(群)発掘調査事業」(平成2年～)として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また、都市整備課から開発事前協議、建設課から建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響をおよぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成4年度の調査は、下記の16箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

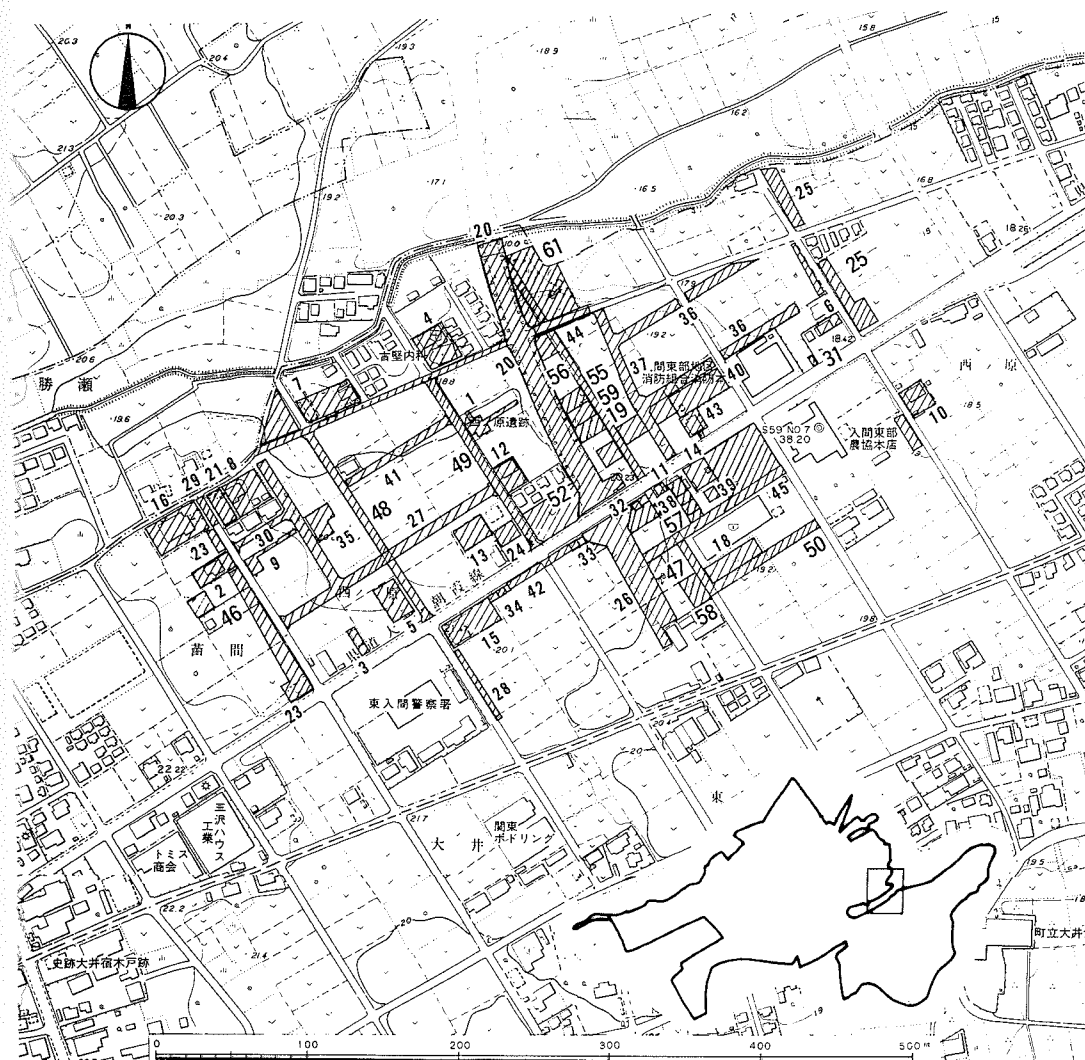
No	遺 跡 地 点 名	所 在 地	開発面積(㎡)	調査原因	調査期間
1	亀居遺跡第33地点	大井町亀久保1011-7	998	個人住宅建設	4/9～4/30
2	本村遺跡第25地点(試掘調査)	〃 大井107	370	倉庫建設	5/21、6/2
3	大井氏館跡遺跡第7地点	〃 大井241-1	157	個人住宅建設	6/3～6/17
4	苗間東久保遺跡第18地点(試掘調査)	〃 苗間字東久保639、640、641、464	906.84	分譲住宅建設	6/2～6/22
5	西ノ原遺跡第56地点	〃 苗間字西ノ原133-2	261.4	〃	6/23～6/26
6	西ノ原遺跡第57地点	〃 苗間字西ノ原143-3、143-4	174	個人住宅建設	7/6～9/1
7	浄禅寺遺跡第7地点(試掘調査)	〃 苗間字東久保573-4	831.15	共同住宅建設	7/4～7/17
9	西ノ原遺跡第58地点	〃 苗間字西ノ原137-2	146	個人住宅建設	9/8
10	中沢前遺跡3地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原189-3	272	〃	10/1～10/2
11	西ノ原遺跡第59地点	〃 苗間字西ノ原135-1	494.9	〃	10/6～11/12
12	本村遺跡第26地点(試掘調査)	〃 大井348、369、370の一部	575.7	〃	10/4～10/6
13	本村遺跡第27地点(試掘調査)	〃 大井145	1,101	共同住宅建設	10/27
14	中沢前遺跡4地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原201-2	168	個人住宅建設	11/13、11/20
15	西ノ原遺跡第60地点	〃 苗間字西ノ原136-2	253	〃 (曳家)	12/10～12/25
16	中沢前遺跡5地点(試掘調査)	〃 苗間字西ノ原184-1	732	駐車場造成	2/13～2/18

(坪田幹男)

III 西ノ原遺跡

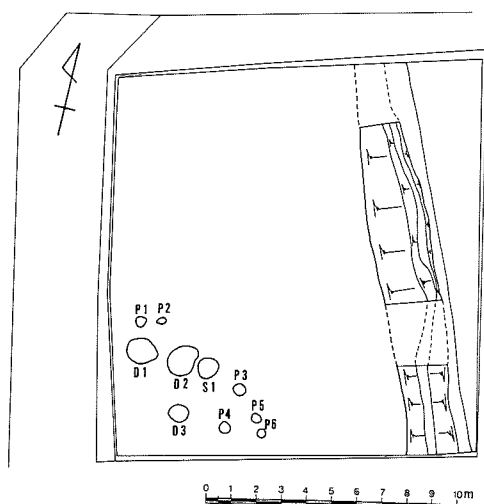
Ⅲ-1 遺跡の立地と環境 西ノ原遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐさかい川の谷頭部から約500m程度下った右岸に位置する。さかい川は前章の亀居遺跡下を東流する福岡江川の南方約1kmを、新河岸川にむけてほぼ平行して流れる武蔵野台地特有の伏流水である。遺跡標高は18~21mで、現谷底との比高差は2~3mを測る程度で起伏の小さい低位台地上に立地する。

本遺跡の発掘調査率は町内遺跡群では突出しており、遺跡面積10haの約40%代が調査されてきている。過去22年間、60箇所にと調査で明らかになった本遺跡の時期は、確認遺構から旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、中世、近世である。特に縄文時代中期にはメガネ状の環状集落が形成され中期全般を通した良好な大規模集落跡として町内屈指の遺跡に挙げられる。今年度は新たに4箇所、面積にして1,328㎡を調査し、早期の炉穴・中期の住居跡他を確認した。



第17図 西ノ原遺跡の地形と調査区 (1/5000)

Ⅲ-2 西ノ原遺跡第56地点



第18図 西ノ原遺跡第56地点遺構配置図
(1/300)

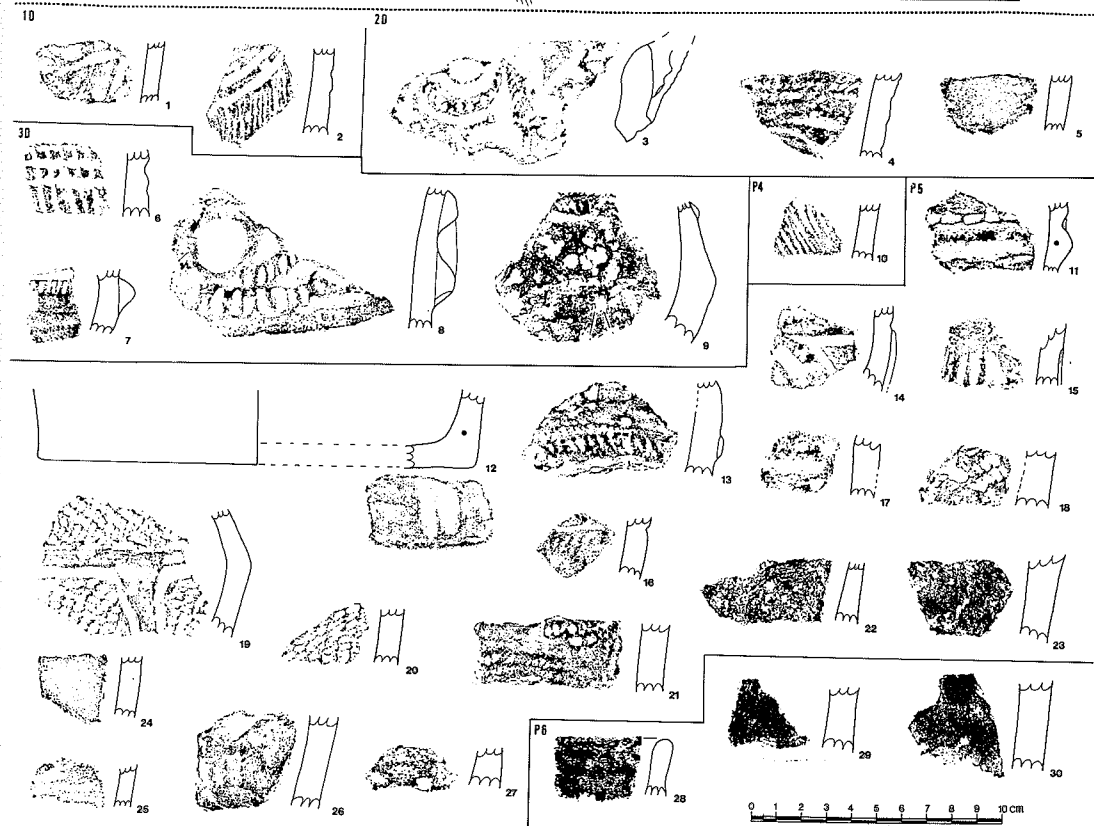
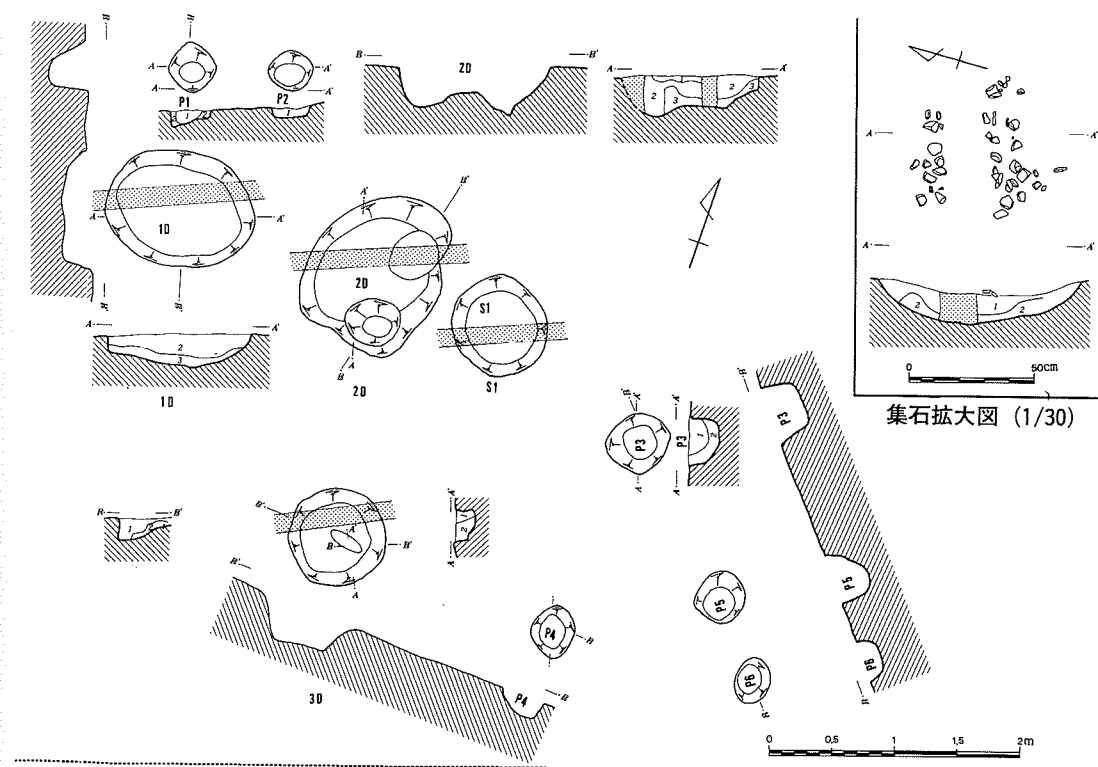
Ⅲ-2-1 調査の概要 1992年6月10日、個人住宅建設に伴い埋蔵文化財事前協議書が町教育委員会に提出された。遺跡地図と照合し現地も確認したところ、調査区の南側を除いて周囲三方は過去の調査が実施され、縄文時代の遺構が確認されているため、地権者と協議の結果、記録保存のための調査を国庫補助事業として実施した。調査は6月23日から重機を使用し無遺物層を除去した後、人力により遺構の確認をおこなった。遺構の精査時点で調査区の南西部分より、比較的多くの縄文土器片が出土し、遺構の存在が予想された。

精査の結果、縄文時代の土坑3基・集石土坑1基・ピット6基と、本遺跡に数多く確認される溝状遺構1条が確認された。同月26日には全ての遺構の測量等を終え、機材を撤収した。

Ⅲ-2-A 縄文時代の遺構と遺物＝土坑・ピット (第19図)

調査区域の北東部の一角は、1990年度に町遺跡調査会が道路廃止に際し発掘調査(第44地点)を実施している。今回は、調査区の南西部隅に集中して縄文時代の遺構が確認された。遺跡全体の位置関係から見ると、本地点は谷に落ちる肩部に位置し、西隣の第20地点からの続きのピット群が、ちょうど本地点の南西コーナーにかかる。土坑・ピット等の計測値は下表のとおり。

遺 構	平面形	確認面の径cm		底 径cm		深度cm	覆 土	出 土 遺 物	
		長径	短径	長径	短径			時 期	挿図第18図
1号土坑	楕円形	120	95	105	70	25	2茶褐色土・3黄褐色土	加曽利E	1・2
2号土坑	楕円形	135	105	100	80	25	2茶褐色土・3黄褐色土	勝坂式	3～5
3号土坑	円 形	80	80	60	55	30	1暗褐色土・2茶褐色土	勝坂式	6～9
1号集石	円 形	80	75	55	55	18	1暗褐色土・2茶褐色土	45個の円礫、被熱礫少ない	
ピット1	隅丸方形	40	35	20	16	15	1暗褐色土・2茶褐色土	—	
ピット2	円 形	35	35	25	15	10	1暗褐色土	—	
ピット3	隅丸方形	53	48	25	25	25	1暗褐色土・2茶褐色土	—	
ピット4	楕円形	45	35	28	20	10	1暗褐色土	不 詳	10
ピット5	円 形	40	35	25	20	38	1暗褐色土	加曽利E	11～27
ピット6	楕円形	35	25	23	20	15	1暗褐色土	加曽利E	28～30



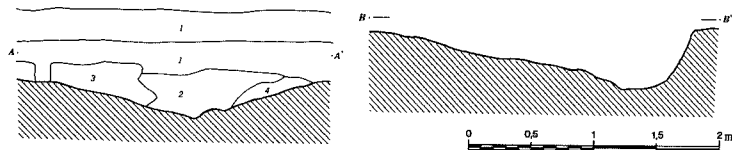
第19図 西ノ原遺跡第56地点 土坑・ピット (1/60) ・出土土器 (1/3)

Ⅲ-2-A(2) 土坑・ピット内出土土器 (第19図)

1・2は1号土坑出土。1は器面の荒れが著しく、2は地文の条線に連弧文を施す。3～5は2号土坑出土。2は波状口縁深鉢で貼付隆帯上に半截竹管文による爪形文が施され、突起部の横には棒状工具による交互刺突文をもつ。5～9は3号土坑出土。6は沈線文と竹管文による交互刺突文をもつ。7・8は2の類の胴部。10は4号ピット出土の地文熬糸の胴部片。11～27は5号ピット出土で、11・12の胎土には金雲母粒を含み、11は断面三角の貼付隆帯沿いに角押文が施される。13～17は貼付隆帯上に爪形文をもつ類で、17は底部に続く部分。18～21は地文縄文の胴部片で17には磨消懸垂文がある。28～30は6号土坑出土で無文。28は小形深鉢の口縁部。

Ⅲ-2-B 溝状遺構 (第20図)

調査区の東側をほぼ南北に走る。上幅で250cm、底面(平坦部)で30～40cmを測る。断面が逆台形状をなす。西側が約 50° ～ 60° の傾斜をもつが、東側は約 15° でだらだらと立ち上がる。覆土は全体に軟質。1はローム粒子含む暗褐色土。2はロームブロックを多く含む暗褐色土。3はトレンチャーによる攪乱。4はローム含まない暗褐色土。底面は凸凹が目立ち、南から北に振り降ろしたクワによる掘削であることが明確に判断できる。また溝の中央部分に大量の礫の投げ込みを確認。この中には縄文土器・石器も混在している。第44地点(1990年6～8月調査)で確認された溝は東西に走り、今回の調査区内で東西と南北に延びる溝が切り合っていた。土層観察から本調査区の南北に走る溝が切り合っていることがいえる。また東西に延びる溝は南北溝内で立ち上がっていた。土器等を含む大量の礫は東西溝部分に投棄されたもので、周辺の畑から採集された縄文土器等の棄て場に溝を利用したものであろう。また溝本来の性格については土地の区画に沿って掘られた境界溝の要素が強い。

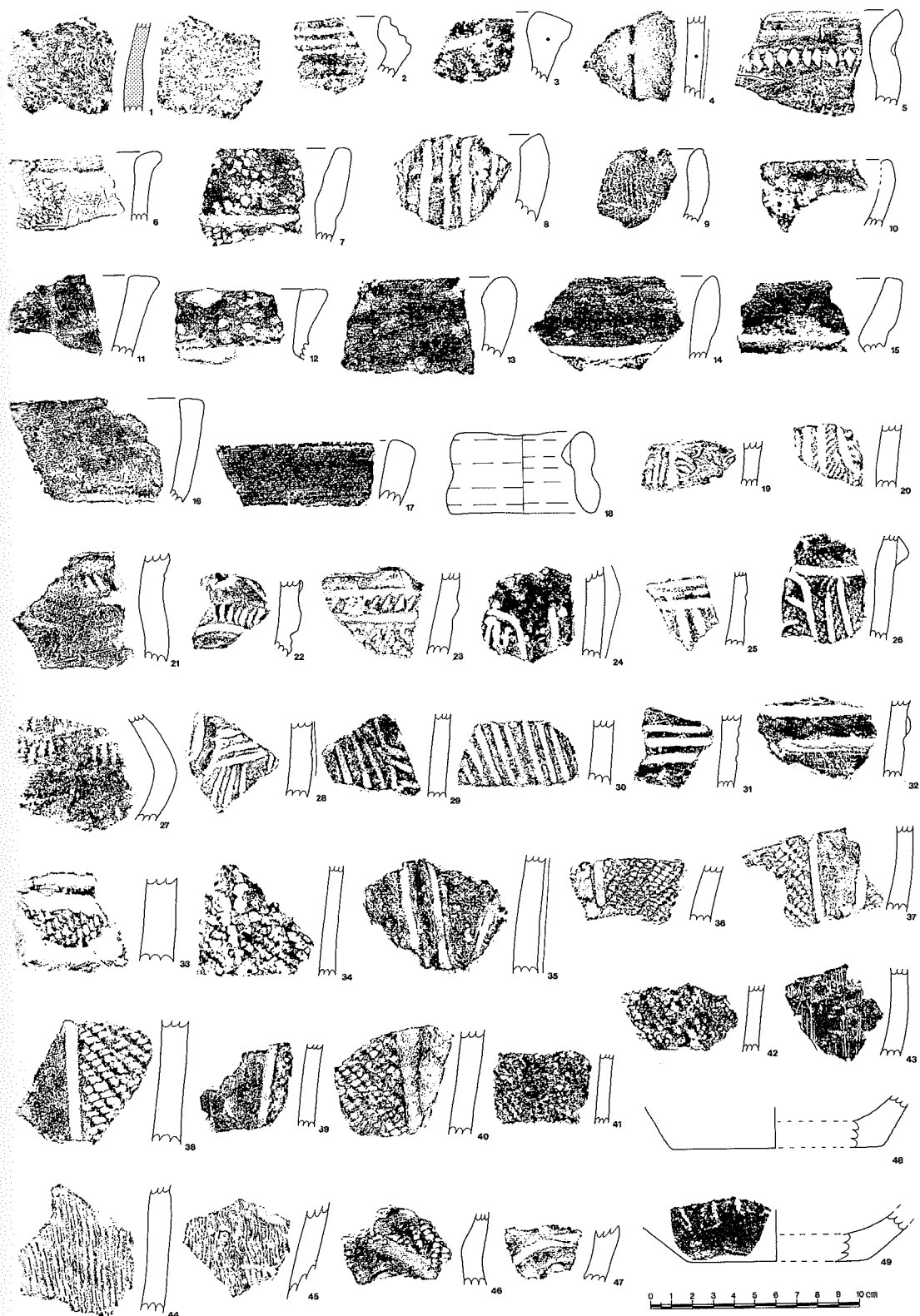


第20図 西ノ原遺跡第56地点 溝状遺構 (1/300)・断面図 (1/60)

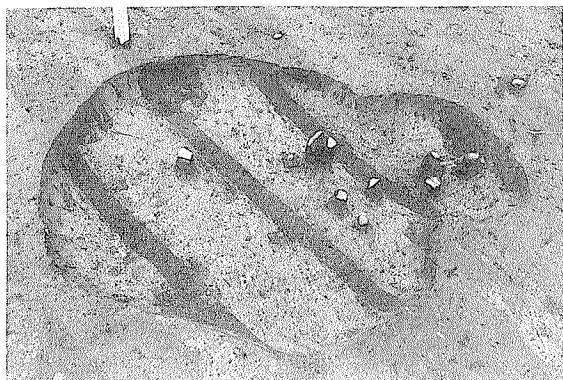
Ⅲ-2-C 溝状遺構・遺構外出土遺物 (第21図) 本地点遺構

外から土器細片を含めて114片が出土した。1は繊維圧痕をもち、胎土に植物繊維を多量に含む。2は口縁部に3列の押引文をもつ浅鉢の口縁部片で、胎土に輝石粉末と微量の金雲母を含む。4は断面三角形の隆帯を貼付けた懸垂文をもつ。胎土に多量の金雲母を含む。4は口唇部の屈曲部に竹管文による矢羽根状の連続刺突文をめぐる。6～17は口縁部片で、8が棒状工具による太い沈線を描く他は、無文で15～17は浅鉢。18は器台で口径65mm。19～26は勝坂期末の胴部片。28～50は棒状工具による沈線文部のみの胴部片。31・32は地文の縄文に沈線をもつ類。33～42は地文縄文の胴部片で、このうち35～40は沈線間磨消しの懸垂文をもつ類。43～45は地文が細条線のみの類。46・47は弧状磨消文。46・47は35～40の類の底部片。

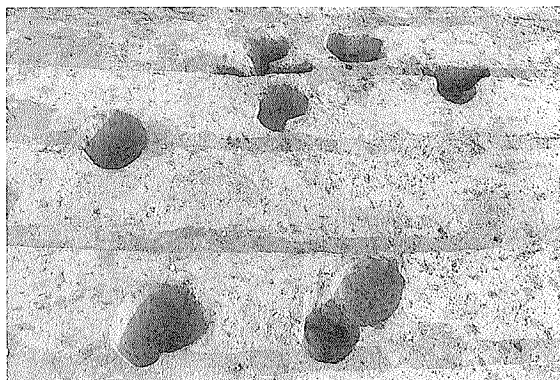
(坪田幹男)



第21図 西ノ原遺跡第56地点 溝内・遺構外出土土器 (1/3)



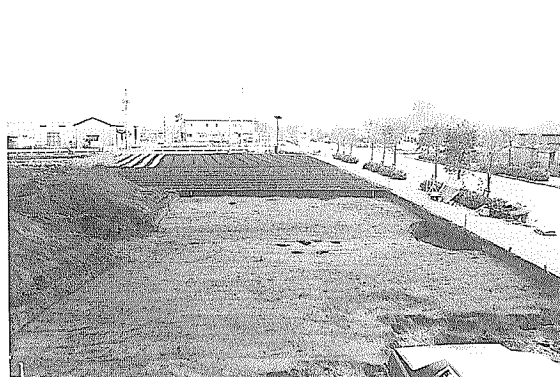
第59地点土坑全景



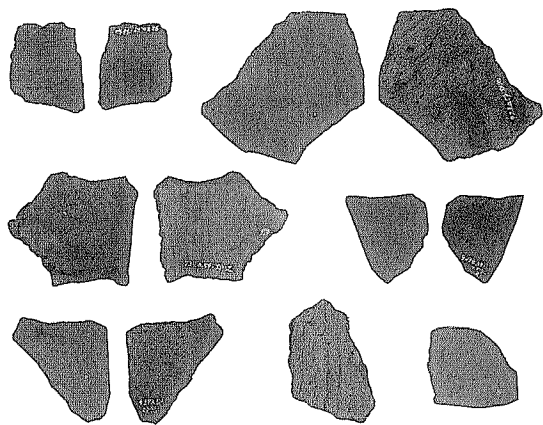
第59地点1～10ピット・11号炉穴



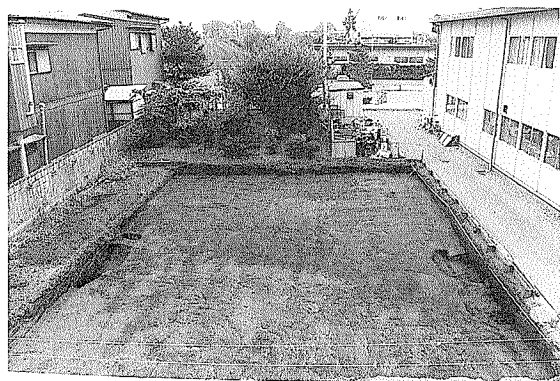
第59地点調査区東側全景



第59地点調査区西側全景



第59地点炉穴出土土器



第58地点調査区全景



第56地点調査風景



第56地点ピット群